

「老の失敗学」

80歳からの人生をそれなりに楽しむ。

畑村洋一郎著 朝日新書（2024年1月30日初版）

1、著者紹介

1941年東京生まれ。東京大学工学部卒業、同大学大学院修士課程を修了。東京大学名誉教授。工学博士。専門は失敗学、創造学、知能化加工学、ナノ・マイクロ加工学。2002年より畑村創造工学研究所主宰。2002年にNPO法人「失敗学会」を、2007年に「危険学プロジェクト」を立ち上げる。著書に「失敗学のすすめ」、「創造学のすすめ」など多数。（裏帯より）

企業向けに畑村塾を主宰、新しいことを考える力を高めるためのもので、参加者の多くは幹部クラスであったり、開発や企画立案の仕事を担当している人たちが集う。似たようなことをイノベーションの促進を目的にした国立研究開発法人科学技術振興機構の「プログラマネージャー育成活躍推進プログラム」で行っている。（p110）

2012年に発足した消費者に関わる広範な種類の事故の調査に取り組むことを役割とする消費者安全調査委員会の初代委員長を務めた。（p94）

極めて詳しい著者紹介をしたのには理由があります。著者ご自身が「失敗の権威」とみられている（著者ご自身の言葉 p203）といわれているように「失敗学のパイオニアであり大御所」だからです。

本著は40代、50代のチャレンジャブルな世代に読まれると、老人が読む以上の効果があると私は感じました。著者自身の失敗談を参考にして分析されているところが多いのも特色です。こんな優秀な方でも失敗もする老化も経験することを知ることだけでも参考になります。

以下では本著が書かれた趣旨を著作権を侵さない範囲で紹介します。（各ゴチ文字は本著からの引用）



2、老いと失敗の共通点について。

学者らしく定義から始めておられる。

(1)失敗の定義

「ある目的を持って行動したものの、何らかの原因や理由によって当初期待していた目的が達成できなかった状態、それが失敗です。」 p14

人が行動する限り失敗はつきもの。①避けて通ることができない。②望んでいないことが起こる。」

「人は1日最大35,000回の選択をしている。」とケンブリッジ大学バーバ サハキアン教授の説にあるように人間の脳は無意識に選択肢の判断している。脳が疲れると失敗も起きる。失敗のない判断であり続けることは不可能であると拙著も思う。

(2)失敗したときの感情、

「無駄なことをした。大損をした。悔しくて仕方がない。不愉快極まりない。人に知られたら恥ずかしいなどといった負の感情にさいなまれて、気力が奪われ、再び挑戦することをやめてしまうこと。」当人が望んでいない感情ばかりである。

相手の言いたいことを正確に受け取るのは難しく、
話し手が価値ある話をうまく伝えることができない、
聞き手は傾聴すべき話を上手に引き出すことができない、
と言うコミュニケーション力の問題があるように思います。

(3)老いは避けてとおれない。当人も望んでいないことが起きる。

「老いるのは長く生きている証しで、誰もが必ず直面する、避けて通ることができないものです。老いによる問題は、改善されるどころか、年々深刻さを増しています。」 p15,24

「老いによって生じる問題は、体力や記憶力の衰えなどを原因としているものが多く、対策を考えるととってもできる事は限られています。自分の老いの状態を観察するときには、自分の身に生じている問題と真剣に向き合わなければならないので、つい目を背けたくくなります。」 p31

「体力面では歩き方、速度が非常に遅くなりました。歩幅が15~20%落ちた、瞬間瞬発力がなくなり転倒するリスクが増えた。。筋力や身体機能が低下してバランスを崩しやすくなります。要するに、いつ転んでもおかしくない状態になるのです。」 p127

(4)失敗と老いの共通点

①避けて通れないこと。②本人が望んでいないことが起こる。 p15

「対象を理解した上でそれなりの備えをしておくと言うのは安心を得るために大切なことなので。この点は失敗対策や災害対策等と同じです。」 p24

(5)悪い老いと良い老いについて

「失敗学における良い失敗は、人が成長する上で必ず経験しなければならない必要な失敗です。こういうものは価値がありますが、数としてはそれほど多くありません。

世の中の多くの失敗は、経験する必要のない悪い失敗です。手抜き、インチキ、不注意、誤判断などから生じるものが典型例で、これらに加えて、自分にとって意味があるものでも、周りに与える影響が大きかったり、心身が大きく傷つけられたりするような自分にとって致命傷になるような失敗なども経験する必要のない、避けるべき悪い失敗としています。」 p34

「歳をとってからは、人間的な成長より、豊かな人生や充実した毎日を送ることの方が大事です。、良い老いとは、（行為や行動より）、心の持ち方、考え方などが重要です。一方、悪い老いとは豊かな人生や充実した毎日を送る事につながらない心の持ち方考え方です。また、自分にとって意味のあるものでも、周りに与える悪影響が大きかったり、周りとの関係を悪化させたりすることで、結果的に自分にとって不利益になることも、避けるべき悪い老いといえます。」 p35

(6)悪い老い、老害のあれこれ。 p46

「悪い老い方の象徴としてすぐに思い浮かぶのは『老害』という言葉です。一般的には、組織の中心人物が高齢化しても、実権を握り続ける状態や、自己中心的な行動で周囲に迷惑をかける老人のことを揶揄するときに使われているようです。対象としているのは必ずしも老人と言うわけではなく、若者が年配者を揶揄するときに広く用いられています。文字から想像するに、「周りに害を及ぼす老人」、「老人によって、引き起こされる実害」といったニュアンスが強くこめられているのは明らかです。



以下は、世間で言われている老害の人の特徴を簡単にまとめたものです。

- ①自分の思っていること、考えこそ正しいと信じていて他人の意見は誤りであると思っている。
- ②自尊心が高く、わがままで、沸点が低くおこりっぽい。
- ③自分の価値観を周りに押し付けたがる。（あの人が言うんだから、仕方がないという風土）
- ④人の話を聞かず、自分のことだけ繰り返し話したがる上、話が長くてくどい。
- ⑤普段は尊大に振る舞っているのに、困った時だけ弱い高齢者のふりをする。」 p46~47

(7)コミュニケーション・トラブル

「世の中のトラブルの多くは、情報や知識、感情等の伝達がうまくいかずに起こっています。この途絶は多くの場合、当人たちが意図していない形で生じています。伝える側も受け取る側も「伝わっているはず」、「理解できたはず」、と思い込んでいるのです。それでいて、実際には伝わっていなかったり、理解できていないので、この乖離の部分が原因になって様々なトラブルが起こっています。」 p44

老いてから生じる日常的なコミュニケーションの問題に「伝えたはずのことが伝わっていない」というのがあります。伝えたつもりわかるだろうでは伝わらない。 p75

失敗学ではどうすれば伝わるか ちゃんと伝えるために必要なことを検討しています。 p77

このコミュニケーション・トラブルについては拙著「わたしの幸せ あなたの幸せ」で詳しく述べ、ベストピアでもしばしば取り上げている「コミュニケーションの決定権は受け手側にある」という法則がここでも証明されている。この法則は失敗学の基本でもあり、失敗の再発防止策にはなくてはならない法則で、いくら強調してもしすぎることはない。

コミュニケーションで老人が注意しなければならないことは以下のことだと本著者はまとめておられる。

- ①わかってもらう努力のエネルギーが失われていく
- ②興味の無い話は頭に入らない。
- ③自分の話ばかりしたがる。

「対策には新しい情報を入手する。それにはまず相手の話をしっかり聞くことを心がけています。」と本著者も言っておられる。

(8)「思い込み」「思い違い」

加齢によって自分の身に起こっている問題や思考に関する問題があります。最近特に気になるようになった思考の問題は、「思い込み」や「思い違い」です。忘れ物も増え、ものを探すのに時間を使うことも増えました。これらは記憶もさることながら、思考に問題が生じているから、起こっているように感じています。一番の原因はやはり脳の中で縮退が起こっているからだと考えます。脳の機能が衰えて、注意力も思考力も以前と比べて、かなり 脳の機能が衰えて、注意力も思考力も以前と比べて劣っている。 並列処理ができなくなった。 p154~155

これは「墓穴をほる」以外の何ものでもないこと。私（小原）はこの対策のために補聴器、集音器の探索の旅を続けているが、著者は簡単に補聴器を発見されたようです。（p121難聴と補聴器参照）

(9)致命的な失敗を避けるための決断。

自分の状態を正しく把握するのは難しい。 p52,55,57

「歳をとってから瞬時の判断力や動作が鈍ってきたので、運転技術がどんどん衰えていった。それで池袋の87歳の男性が運転する自動車事故を契機として、私も運転免許を返上した。」 p52

「『人間には見たいものが見える』、『見たくないものは見えない』。その方向から見る自分が自分にとって利益になるとか、心地よい場合は、決して固定的な見方を崩そうとはしないのが人

間です。自分ではその正当なことをやっているかのように錯覚していますが、実際には危険極まりないことをしているのです。自分が損をするような事は受け入れがたいので、つい自分に甘い見方をしてしまうのは、いわゆる老害につながる思考です。これを避けるためには、『他人の視点』を使うのも有効な手段になります。しかし、他人の視点がいつも正しく効果的とは思えないので、無条件に全てを受け入れるのではなく、内容を精査して選択することが必要です。』p56-57

この指摘は老爺だけが対象ではない。危険学の立場での普遍的なことであると思う。筆者小原の経験でも若くして自分の基準を作り、その基準に合わないものは「悪」と決めつける人がいた。柔軟性にかけるばかりでなく、適切な情報が集まらない、既に老害が始まっている気の毒な人である。

以上9のポイントで本書を紹介しました。失敗学の真髄である対策についてここで述べることは著作権の問題が生じる可能性がありますので、解決策の詳しい内容は、本書をお読みください。

3、ベストピアの執筆者（小原現在82歳）の対策

(1)関連する本を沢山読みました。「80歳の壁」「70歳の正解」「老いと福音」「老後をやめる」等から老いの問題の共通点を探求しました。殆どが医学博士の著作です。今回の「老いの失敗学」は工学博士で企業経営の問題にも精通されていることが特徴です。

(2)共通する有効な対策は何よりも5Sです。

特に一番の「整理」は体力がいりますから、早く始めるに越したことはありません。

人間関係の整理も気力と勇気が入ります。

(3)拙速は巧遅に勝る（孫氏の言葉）。気がついたら早く、早く失敗すればリカバリーができる。

「後で」をやめる。「後では」忘れることが多い。

(4)タイムリーに応答する。

人間関係においてはとても大事なことです。私のこの実行率は100に近いと自負しています。返事は必ず書くことにしています。手短に早くストロークがモットーです。

(5)心身の健康に留意する。

これは一番にすべきことですが、私自身が虚弱なので自信をもってお勧めできないのです。虚弱なりに早く対応していますので今のところ大事には至っていません。

しかし、かかりつけのお医者さんは内科、整形外科、歯科、耳鼻科、皮膚科、眼科、神経内科です。毎日どこか痛いか痒いですが、我慢ができないので書ききれない対策をしています。

(6)難聴対策、これも優先順位は上位です。毎日のことです。聞き取れないとコミュニケーションに支障が出ますから対策は万全です。私のできる最大のことは聴くことですので、耳の機能がなくなると私の存在も危うくなります。対策が大袈裟で周りに不快感を与えているかもしれませんが、お許しいただける人と付き合っています。

(7)忘れ物対策、必ず何かを忘れるのが私の特徴です。

対策のしようがないというのが本当のところでは、それでも「外出持参チェックリスト」を作っています。そしてチェックするのですが、何か一つ忘れます。チェックリストがあっても利用しても忘れるのは何故か？この対策を今考えているところです。これから実行しようと考えていることは、持参する現物を全て机の上に並べてチェックすること。（ホテルをチェックアウトするときにはしています。）この動作ができないところでは、やはり忘れ物をしてしまいます。その対策が必要です。

企業経営でのマニュアルも同じように注意が必要です。

(8)探し物をしない。

整頓が大事です。これは諦めて探さないことにしました。あるもので間に合わせることにしました。

(9)電気のスイッチを切る。エアコンを消す。戸を締める、ふたをする。窓を閉める等々——これも100%難しいことです。切ったつもりが切っていなかった。締め忘れ、消し忘れ多々
外出時はコンセントを抜くことにしています。ガスの使用時は場を離れないこと。

⑩妻との会話を大切にする。これは満点がもらえると自慢しています。毎日最低2時間は雑談しています。お互いに情報が多いので話題に事欠くことはありません。土曜日は讃美歌を教えてもらっています。

ここで大事なことを一つ思い出しました。有益な情報です。

死亡した後すぐに必要なものが原戸籍謄本です。今までは本籍地でないと発行できなかったのが3月1日から現住所の役所から入手できるようになりました。既に市役所からの回覧板で周知されていると思いますのでご確認をして1通取っておくことをお勧めします。原戸籍謄本がないと預金の引き出しができません。一番大事な老後対策でした。

もう一つ意義のある言葉を発見しました。

This is the first day of the rest of your life.

今日という日は、あなたの 残された生涯の第1日目である。

上記の英文は船本弘毅著「聖書に聴く『生と死』」p58からの引用です。

次ページからパリ通信です。

パリ通信・第147号

国際女性デー



パンテオン近くに住んでいるのでよくその前を通る。パンテオンはルイ15世(1710-1774)がパリの守護神「聖ジュヌヴィエーヴ」を祀るために建てた教会で、1764年建立の礎石が置かれた。ジャック=ジェルマン・スフロ(1713-1780)が建築家に任命され、1790年に工事は完了したが翌1791年フランス革命時に教会からパンテオン(廟)と呼び名が変わる。1885年国民的な大作家ヴィクトール・ユーゴー(1802-1885)がパンテオンに永眠することになったことからパンテオンは「フランスに尽くした偉大な人」の墓所となった。

現在、ユーゴーを始め82名(男性75名、女性7名)がパンテオンに眠っている。この2月にはミサック・マヌキアン(1909-1944)と配偶者メリネ・マヌキアン(1913-1989)の二人が80年経って一緒にパンテオンに入った。1915-16年アルメニア人虐殺によってフランスに逃れた二人は共にコミュニスト活動家となり、ミサックはレジスタンス活動で1944年パリ近郊のモン・ヴァレリアンで銃殺された。戦後80年経って外国人マヌキアン夫妻がフランスに尽くした偉人と認められたことは大きな意味がある。

女性7名にはメリネの他、科学者マリー・キュリー、同じくレジスタンス活動に貢献した歌手ジョゼフィン・ベッカー、政治家シモーヌ・ヴェーユがいる。シモーヌ・ヴェーユがパンテオンに入ったのは2018年で今世紀に入って女性の人権のために闘ってきた女性たちがクローズアップされるようになった。

3月8日は「国際女性デー」。1908年ニューヨークで起こった女性労働者のストライキに起源するが、暴力や差別を受けずに生きる権利、教育を受ける権利、投票の権利、所有者になる権利、男女平等の給与など基本的な女性の権利と自由を再確認し訴える日である。アメリカやヨーロッパで妊娠中絶を禁止する国が増えつつある今日、世界に先駆けて2024年3月「国際女性デー」にフランスで女性に妊娠中絶の自由を法律化したことは意義深く、フランスのフェミニズムの背景に支えられていると言えるだろう。

1971年4月5日「ル・ヌーベル・オブセルバトゥール紙」に「343人のマニフェスト」と言う妊娠中絶法を訴える文書が掲載された。

シモーヌ・ヴェーユ
Simone Weil



不法中絶を選んだ女性343名の署名だ。マニフェスト文は作家シモーヌ・ド・ボーヴォワール(1908-1986)が書いている。「フランスで毎年無数の女性たちが妊娠中絶をしている。罪に問われるのを恐れて危険な条件下で中絶を余儀なくされているが、手術は適切な医療下では最も簡単なものである。何百万の女性たちが黙って口を閉じている。私もその一人だが中絶をしたことを宣言する。私たち女性全員で中絶できる自由を訴えよう」

ボーヴォワール、マルグリット・デュラス、カトリーヌ・ドヌーヴと言った著名人が闇の中絶を認め勇気ある宣言を行い、女性弁護士ジゼル・アリミ(1927-2020)もそのリストにあった。

ジゼル・アリミはチュニジア生まれでパリ大学法学部でフランスの弁護士資格を得る。1950年代からアルジェリア独立運動を弁護し、フランス兵に拷問、性的暴力を受け殺人の罪に問われていたアルジェリア女性ジャミラ・ブパシャを擁護し釈放に導いた。

ジゼル・アリミ
Gisèle Halimi



シモーヌ・ド・ボーヴォワールやサルトルと言った当時の知識人に呼びかけてメディアを利用し性的被害を受けた女性たちの弁護を続けた。同性愛者の女性二人が四人の男性から性的暴力を受け、裁判に訴えることを助け、彼女たちに付添い勝利をもたらした1972年「ボビニー裁判」はジゼル・アリミの力量だった。こうした背景があって、1975年バラデュール内閣で厚生大臣を務め、妊娠中絶法を通したシモーヌ・ヴェーユへの道が繋がっていく。女性の人権を守るために力を尽くしてきた女性たちが訴えるのは「権利や自由は人から与えられるのではなく自分で獲得するものだ」ということ、人生は闘いの連続であると教えている。彼女たちの努力を無駄にせず、意志を受け継ぎ、女性が生きやすい社会を今後も目指していきたいと思う。(古賀順子記)